

—《書評》—

川原秀城編 勉誠出版

『漢学とは何か

—漢唐および清中後期の学術世界』

(国際日本文化研究センター共同研究員) 山村 横

漢学とは何であろうか。それは、本書の冒頭で「中国学において宋学と対をなす概念である」と説明されている。宋学とは、中国の宋代（北宋960～1127、南宋1127～1279）に起こった儒学の流派の総称である。儒学は本来、経世致用の学問と言われるように、治世、あるいは現実の生き方を探求する学問として広まった。しかし時代が下るにつれ、体系性・思索的な深い探求に乏しかった儒学に満足できない向きが生じ、彼らは仏教、あるいは道教に流れることが往々にしてあった。そうした仏教・道教を吸収して新たな世界観を獲得した学問、それが宋学である。

宋学では、周濂溪、張横渠、程明道、程伊川などが代表的な人物とされている。特に周濂溪が著した『太極図説』は、道教に依拠することでこの世の根源を「無極にして太極」として、陰陽・五行の展開によって世界の生成を説明する。同書は、宋学の思想をそれまでの儒学と分かつものとなった。

「宋学を朱子学とも呼ぶ」と説明されることがあるが、学問的な定義に従えば、朱子学と宋学はイコールではない。南宋の時代の官僚・朱熹（1130～1200）が、それまでの宋学の流れを整理して体系づけたのが、朱子学である。朱子学の影響力はすさまじく、日本や朝鮮にも伝わり、統治理念の重要な要素となった。本家中国でも、朱熹の施した注釈は科挙に採用された。明代（1368～1644）に至ると、王陽明（1472～1529）という儒学者が朱子学を批判して、新たな学問を創始する。いわゆる陽明学である。しかし、その内容は朱子学の体系を完全に否定するものではなく、陽明学を、宋学の一部とみなす議論もある。

では漢学とは何か。簡潔に定義すれば、宋学が誕生する以前の儒学、特に漢唐の訓詁学、ならびに明の後の清代（1644～1912）に成立した考証学のことを指す。いずれも世界観というよりも、文献の字句や意味内容について考察することで、儒学の經典に対する正確な解釈を探求する学問である。しかし、考証学の方がより合理性、実証性を重視しており、今日の文献学に近い性質を持っているという特徴がある。歴史的に見れば、漢唐訓詁学と清朝考証学との間に挟まれるようにして、宋学と呼ばれる一連の学問が存在している。

宋学、あるいは朱子学や陽明学は、世界の原理や生成に関して、形而上の「理」と形而下の「氣」によって説明しており、学者によってどちらか一方を重視したり、あるいは折衷によって記述したりしている。そのため「宋明理学」という呼び方もある。その壮大さと哲学的な世界観のためか、現代における儒学の研究領域では宋学に比べ、総じて漢学はあまり人気がない。しかし、本書は漢学を構成する学問世界が、いかに豊饒であるかを示す。本書の言葉を借りていえば「人文学（狭義の哲学）のそれを大きく凌駕」している。

第一部では両漢の時代、第二部で六朝と唐、第三部で、清朝の漢学を扱っている。そして第四部では「総論」として、「漢学とは何か」という章が設けられている。すなわち全体で、宋学に対する学問としての漢学を網羅的に論じている。執筆陣はいずれも斯界の泰斗、あるいは新進気鋭の研究者ばかりである。漢学の世界に興味がある入門者から、最新の研究動向を知りたい研究者まで幅広い読者を満足させる内容となっている。以下では各章の主な論点を紹介していきたい。

第一部「両漢の学術」の巻頭を飾るのは、川原秀城「今文・古文」である。今文学・古文学は、經書の解釈にあたって漢代に流布していた文（今文）と、発掘された秦以前の文（古文）のどちらを用いるかという、漢代に端を発する二つの学問

的立場である。本論はまず、経古文学を提唱した劉歆が今文学派との間に論争を巻き起こし、やがて今古文の折衷に至ったというこれまでの「通説」を紹介する。それに対して、劉歆の著作には経今文学からの引用や語句も少なくないと指摘する。むしろ彼を初めとする古文学学者たちは、今古文の經典に通曉することで、経書研究に際して古文を重視する立場を明確にしていったとする。

それに続く井ノ口哲也「劉歆の学問」では、劉歆が古文学の発展において、いかに重要な人物であったか論じている。劉歆が生きた前漢時代、今文のテキストを用いた博士が政権の要職を占めていた。それに対抗するために、新たに発掘された古文という「新機軸」を打ち出したのが劉歆であった。劉歆は父の劉向の書籍整理事業を引き継ぎ父子二代で完成させたため、本人の影が薄くなりがちだが、編纂した『七略』の後世への影響は大きいとする。劉歆の思想は、班固や張衡にも受け継がれているという。劉歆の説が着実に後代へと継承されたことを、本論は明らかにする。

平澤歩「『洪範五行伝』の発展と変容」は、失政と災異とを関連づけた『洪範五行伝』が、その元となった『尚書』洪範篇からどのように変容したかを分析する。『洪範五行伝』は、本来の災異とは直接関係ない内容も後世に付加される。こうした事象の先鞭をつけたのが、この書を他經と関連させた劉向・劉歆父子であるとみなす。

田中良明「前漢経学者の天文占知識」は、異質であるはずの経学と占術の区分が、前漢においては曖昧であったことを示す。特に、前漢の前半期には「儒家もまた他者の説によって自説を補うこと」があったという。本論では「漢代儒学の特異な点の一つ」として、『易』を経書の筆頭としたことを挙げ、その理由を儒家による陰陽説の受容、あるいは需要と推測する。他に、董仲舒・劉向・劉歆という春秋学者であり災異説者でもあった者たちが、天文占知識を有し、時にそれを用いて『春

秋』を解釈し、災異を説いていたことを明らかにする。それはすなわち、前漢の学術が曖昧な境界を有していたことによる豊かさを、見る者に思い起こさせてくれる。

ここからは第二部「六朝・唐の漢学」に入る。古橋紀宏「鄭玄と王肅」は後漢に生きた鄭玄と、彼の説に異を唱えた王肅を主に取り上げる。後漢において、古文学では、複数の文献の比較検討によって文意を明らかにする手法が好まれたため、古文学でも今文学の兼修がなされた。鄭玄はこうした流れを受け、諸文献の整合性を精緻に解釈した。その結果、当時の制度と合致しない主張をしてしまい、それに現実的立場から修正を加えたのが王肅であったという興味深い論点を示す。

池田恭哉「北朝の学問と徐遵明」では、北魏の大儒と称される徐遵明の説を考察する。徐遵明は当初張吾貴の学団にいたが、弁舌巧みに人を魅了する割に学問的根拠が薄弱であった彼の門下に、長く留まることはなかった。主に独学で研鑽を積んだ徐遵明は他の学団とのせめぎあいの末、自らの影響力を拡大していく。本論は、彼の学団の実態や学問、そこに集った人物を紹介している。

南澤良彦「明堂に見る伝統と革新—南北朝における漢学—」は、中国の前近代に多数建立された明堂を通して、南北朝期の漢学の性質を考察しようとする意欲作である。特に南朝の明堂は西晋の裴頠の「一屋之論」の影響を受けている。これは内壁のない柱と方形の建物のみで構成される「殿屋」だけを建造して、儀礼以外の要素を一切排除する。本論では「きわめて玄学的」と評されている。彼の案は玄儒兼修が普及した南朝で受容され、北朝では嫌悪の対象となる。そこに、南北朝の学術の違いを見出す。

この後宋学の時代をまたぎ、第三部は「清朝の漢学」を扱う。木下鉄矢「清朝考証学と『論語』」は清朝の考証学者たちの見方を明らかにするため、まず『礼記』大学篇にある「明徳」の読解

の問題を扱う。件の文章を『大学』として独立させたのは、朱熹である。宋学の中心である朱熹の説に異を唱えることが、当時既にできた。他に、これも朱子の『論語集注』に批判を加えた段玉裁『説文解字注』を取り上げるなど、清朝の学問の基本性格を知るのにふさわしい論説である。

水上雅晴「清代漢学者の経書解釈法」は、清朝の漢学者たちが直面した課題について考察する。漢代の「五經」、宋代の「四書」という明確な基準が存在した時代とは異なり、清代の学者は自らの学術の正当性を主張する必要があった。本論によれば、その議論には二つの特徴がある。一つは誰もが解釈に納得できる普遍性の追求であり、もう一つは西学により発展した曆算学の影響である。

続く陳捷「乾隆・嘉慶期における叢書の編纂と出版についての考察」は、乾隆・嘉慶という二つの時期に出版された叢書を通して、考証学の様相を明らかにする。乾隆期には『四庫全書』に代表される大型の叢書が編纂された。『四庫総目提要』には明代の叢書に対して、主に文献の信憑性への批判が述べられており、学者が考証の重要性を認識していたことがうかがえる。当時、豊富な文献、優秀な人材、出版印刷業の充実など条件が揃っていたことも、良質な叢書の編纂を可能にした。

新居洋子「嘉慶期の西学研究—徐朝俊による通俗化と実用化—」では、清代学術の重要な側面である西学に焦点を当てる。この時期の西学が一部の士大夫と宮廷の専有物に過ぎないという説に異を唱え、西欧科学を民間に普及させようとした徐朝俊を取り上げる。彼は竜尾車（=アルキメデスポンプ）など、西洋技術を積極的に紹介している。さらに地を「地球」と呼び、大地が球体であることに言及した。こうした見解は、彼が同時代の学者から一線を画す存在であったことを示唆する。

第四部は「総論：漢学とは何か」である。渡辺純成「清朝考証学における意味論分析の数学的原

理と満洲語文献への応用—データ・サイエンスとしての漢学—」は、漢学の文脈に対して現代数学を導入した手法を用いて分析する、興味深い試みである。こうした議論によって清朝考証学の方法論が、数学的側面を有することを明らかにする。

志野好伸「漢学は科学か？—近代中国における漢学と宋学の対立軸について—」は、冒頭でも触れた本書の問題提起にひとつの回答を与える、正に掉尾を飾るにふさわしい一篇である。宋学＝哲学、漢学＝科学であって哲学ではないという言説の由来を、近代中国に見る。いわゆる「科学と人生観論争」に参加した張君勵、胡適、馮友蘭ら、またそれ以前に王国維に、既に漢学と宋学の対立が持ち込まれていたことを述べる。

以上のように、漢学の奥深い世界を体験することができ、最新の学術的成果を反映した本書を、是非各方面が参照されんことを望む。

（2020年7月、256ページ、本体2,800円+税）